

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 中国語初対面会話の談話分析  
—発話レベルから相互行為レベルへのポライトネス—  
氏 名 望月 雄介

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、中国語初対面会話における話し手と聞き手による相互行為 (interaction) 及びポライトネスについて考察したものである。ポライトネスに関しては従来、話し手の発話に焦点を絞った発話レベルにおける研究が主流であったが、本研究では、話し手の発話に対する聞き手の反応や応答、並びに双方向による情報交換までを射程に捉えた相互行為レベルにおけるポライトネスの諸相を明らかにすることを目指した。

初対面会話の形態は様々であり、一方の会話の参加者 (以下、会話参加者と称す) が事前に相手に関する情報を有しているような面接等の場面や互いに相手に関する情報を一切共有していない場面がある。本研究では、相手に関する情報を一切有していない場面の会話をデータとし、会話参加者が互いに情報を交換しながら会話を継続させる際に表れる配慮を考察対象とする。配慮と言っても一様ではなく、会話参加者が相手に嫌な思いをさせないための、あるいは言語表現の丁寧さを重視した「対人的配慮」と会話に摩擦を生じさせないためになされる、あるいは会話の継続や展開方法に対する「場的配慮」が存在する。また、言語表現や行動に丁寧さを求める配慮行動だけではなく、敢えて丁寧さを求めない配慮行動も存在する。

本研究では主に会話参加者がどのような情報を開示するのか、または開示しないのかといった自己開示 (第3章)、相手の発話に対する反応としてのあいづち (第4章)、会話を展開させるための前提情報の挿入 (第5章) について取り上げ考察してきたが、これらは対人的な配慮行動ではなく、会話を円滑に進行、展開するための配慮行動、即ち場的配慮行動であると考えられる。本研究では、言語表現の丁寧さに焦点を当てた対人的配慮行動ではなく、会話に摩擦を生じさせないためになされる、あるいは会話の継続や展開方法に対する場的配慮行動に焦点を当てて考察を行った。

相互行為レベルでポライトネスを論じるにあたって、本研究では3つの目的を設定した。1つ目は、中国人大学生及び大学院生 (以下、中国人学生と称す) から構成される会話参加者が織りなす相互行為の実態を捉えることである。2つ目は、話し手としての配慮行動だけでなく、聞き手とし

での配慮行動を論じる重要性を示した上で、相互行為レベルのポライトネスを包括的に記述することである。3つ目は、発話レベル中心であった従来のポライトネス理論の問題点を指摘した上で、相互行為レベルでポライトネス理論を再検討することである。

本研究の構成及び各章の要旨は次の通りである。

序章では、本研究の目的と各章の構成を述べた。

第1章では、まず初対面会話の特質について述べた。会話参加者は互いに相手に関する情報を共有していないことから、通常、初対面会話には緊張感が伴う。本章では、初対面会話においてなぜ不安を感じるのかに関して考察し、会話参加者の人数、性別、年齢、社会的立場といった要素を挙げながら特質について論じた。また、これまでのポライトネス理論の主流とも言えるストラテジー中心のポライトネス理論と「わきまえ」中心のポライトネス理論を概観し、両者に関する評価と問題点を明確にした上で、両ポライトネス理論を相互補完的に踏まえた新たなポライトネス理論を確立する必要性を主張した。

第2章では、本研究で使用する会話データの収集方法、並びに年齢、学年、出身地、専門分野といった調査協力者の情報を示し、さらに調査協力者に対して行ったフォローアップ・インタビューの実施方法について記載した。本研究が使用するトランスクリプションに関しては、文字化の方法、文字化の規則、発話文の認定方法を提示し、また、量的分析に必要なコーディングと集計方法を示した。

第3章から第5章では、会話の継続、展開にみられるポライトネスを考察するために、「自己開示」、「あいづち」、「前提情報の挿入」という3つの言語行動を取り上げた。初対面会話において、自身の情報を相手に開示する自己開示 (self-disclosure) は、相手に対する情報を得ることで、初対面会話に伴う不安や緊張を取り除くためになされるものであり、人間関係を構築する上で有益な手段となる。また、会話参加者が自身の情報を開示しながら互いの共通点を模索する行動は、共通背景の構築の手段となるため、会話の展開に対しても大きく影響する。あいづち (back channels) は、話し手に対する聞き手の協働的な行動の一種であり、聞き手は「話を聞いている」、「話を理解している」というメッセージを送りながら話し手が話しやすい環境を作り出す。聞き手によるあいづちがない場合、話し手は聞き手が話を聞いているのか、理解しているのかが分からず、不安になる可能性がある。また、聞き手があいづちを打たなければ、話し手は、聞き手が話されている話題に関心を持っているのかが分からず、会話を展開するか終結させるかに迷いが生じる可能性がある。以上の理由から、あいづちは会話の継続に必要な言語行動と言える。前提情報の挿入は、話し手が話題を展開しやすくするための言語行動である。話し手は、前提情報の挿入を通じて聞き手と情報を共有してから話題を展開するため、前提情報の挿入は会話の継続、展開に必要な言語行動と言える。

これらの言語行動は会話の継続と展開という点において、沈黙や理解のズレによる摩擦を生じさせないための、また、情報交換によって不安要素を減少させるための重要な行動であることから、本研究では以上の3つの言語現象に焦点を当て、話し手、聞き手としてのふるまい及びポライトネスについて考察した。

第3章では、会話参加者による自己開示について分析した。本章では会話の流れに沿って、まず自己開示の下位類である「自己紹介」を分析した。中国人学生は自己紹介の場面で、自身の名前、年齢、方言、民族といった個人に関する客観的情報よりも、所属、学年、専門、卒業校といった会話参加者の共通基盤である学校生活に関連する情報を優先的に開示していることを示した。さらに、中国人学生は自己紹介の中で相手の所属、学年といった身分を確認しつつ、互いに出身地の情報を開示しながら共通話題を模索しており、その後出身地の話題はこれまでに行った場所等の話題に連鎖するケースが観察されたことから、会話の継続、展開において、出身地の開示情報が作用することを指摘した。自己紹介後の会話においても、授業、卒業後、(本調査への)参加経緯、大学受験、検定・資格、大学生活のような、大学が背景にある内容の情報が開示されやすい反面、好きなもの、家族、恋人、スポーツ、住まいのような会話参加者の私生活に関わる情報は開示されにくいという傾向がみられた。本章では、自己開示の開示内容について、会話が展開されやすい開示情報と展開されにくい開示情報があることを論じた。

第4章では、聞き手の言語行動という観点から、中国人学生が打つあいづちに着目して考察を行った。あいづちは、聞き手が「話を聞いている」、「話を理解している」、「話を続けて」等のサインとして機能する。適切な場所であいづちが打たれなければ、話し手は聞き手が理解しているのか把握できず、会話の継続に迷いが生じ、ゆえに、話し手は会話をスムーズに継続、展開できなくなる可能性が出てくる。したがって、会話がスムーズに継続するためには、聞き手のあいづちによる協働的行動が必要となる。話し手と聞き手が情報量の少ない発話を交換し合うようなインタラクティブ・スタイル (interactive style) の発話では、情報交換が活発に行われることにより、話し手、聞き手の役割が頻繁に交替するのに対し、話し手がまとまった情報を伝えるようなテリング・スタイル (telling style) の発話では、話し手と聞き手の役割はあまり交替しない。本章では、会話参加者がテリング・スタイルにおいて聞き手役に徹する際にあいづちを多く打つ傾向にあることを指摘し、談話スタイルと聞き手としてのふるまいといった観点を交えてあいづちの生起環境を論じた。

第5章では、現代中国語の語気詞“嘛”に着目し、話し手が前提情報を挿入する際に用いる“嘛”の用法並びに前提情報挿入直後の聞き手の行動について考察した。分析の結果、“嘛”を伴うフレーズは、話し手がこれから話そうとする話題を展開するに当たり聞き手が知っておくべき情報として挿入されるものであり、話し手がこれを事前に示すことで話題の継続、展開をスムーズにする役割があることを明らかにした。また、相互行為レベルにおいては、話し手が“嘛”を用いて前提情報を挿入した直後に、聞き手があいづちを打つケースが多く観察されたことから、“嘛”は話し手が挿入した前提情報が聞き手に共有されているかを確認する役割を果たすことを指摘した。

第6章では、これまでのポライトネス理論における問題点を述べた上で、第3章から第5章で行った考察を基に、会話の継続、展開におけるポライトネスを再検討した。自己開示における配慮行動では、学校生活に関連する社会的領域の情報が趣味、嗜好といった私的領域の情報より優先的に開示されることが明らかとなり、会話参加者は対人的配慮だけではなく、開示内容の順序や話題の展開に対しても配慮していることを指摘した。あいづちにおける配慮行動では、話し手だけではなく、聞き手も同様にコンテキストが要求するルールに従っていることを示した。これらを踏まえ、

本章では、ポライトネスを考える上で話し手としての配慮行動だけではなく、聞き手としての配慮行動も同等に扱うべきであると主張し、話し手としての配慮行動を「話し手のポライトネス (speaker's politeness)」、聞き手としての配慮行動を「聞き手のポライトネス (listener's politeness)」として論じた。これら2つの概念は、発話レベルのポライトネスの枠組みを越え、話し手と聞き手それぞれにおける対人的配慮と対場的配慮の観察を可能にしている。前提情報の挿入における配慮行動では、話し手が“嘛”を使用して前提情報を明示する際、“嘛”の「当然だ、明白だ」という語気が作用することによって、話し手は新情報をすでに聞き手が知っているかの如く挿入することができる。その結果、話し手は聞き手との共通背景を構築することを通じて、聞き手が挿入された前提情報直後の話を理解しやすくなるように配慮していることを指摘した。また、本章では日本語の例も挙げ、日本語では、話し手が前提情報を挿入する場合、情報の新旧によって言語形式を変える必要があるが、中国語では、情報の新旧に拘わらず“嘛”を用いて前提情報を挿入できることを示した。日中両言語では、前提情報の挿入方法が異なることにより、共通背景の構築という言語行動において考慮すべき点が異なることが明らかになった。これは会話の継続、展開上、各言語における場的配慮が異なることで、母語話者と非母語話者による接触場面で理解のズレが生じる可能性があることを意味する。また、話し手が“嘛”を使用して前提情報を挿入した直後に、聞き手があいづちを打つ傾向がみられることから、「応答」に着目して聞き手としての配慮行動について論じた。

終章では本研究の考察を基に、初対面会話における話し手、聞き手による相互行為の様相を体系的に示した。また、これまで会話参加者の配慮表現として研究されてきたポライトネス・ストラテジーはポライトネスの一部にすぎず、ポライトネスの全体像を捉えようとするのであれば、話し手、聞き手のポライトネス (話し手、聞き手としての配慮行動)、コンテキストを含めた相互行為という観点が不可欠であることを述べた。さらに、これまでのポライトネス研究では言及されてこなかった会話を円滑に継続、展開するための場的配慮行動の様相を明らかにし、ポライトネス研究へ新たな視点を示した。